

第十五講 「人類の罪」(二) 第三章一節—二十節の研究 (五月一日)

第三章九節—二十節は全人類を罪人と定めし箇處であること前述せしとおりである、そして全人類と云へば勿論其な中に自己の含まれ居ることを認めざるを得ない、然らば自己が罪人と定まりしは厭ふべき事であるか、否これ却て祝すべき事である、罪なき所に救はない、そして罪の感覺の浅い所には救の喜びも浅く、罪の感覺の深き所には救の喜びも深い、深く恩恵の寶泉に汲まんと志す者は先づ鋭利なる解剖力を以て自己の心を切りさかねばならぬ、されば罪の認知は信仰の礎石として極めて重要なものである、我等は再び十節—十八節(即ち舊約聖書よりの引用句を重ねし箇處)に注意する所あらねばならぬ(前講参照)。

「義人あるなし一人もあるなし」と第一語は先づ力強く我等の胸に迫り來る、之果して人類の實狀であらうか、我等は然りと斷定を敢て下すものである、之を現代に於て見れば、米國の前大統領ウィルソンの如きは今の世に珍しき理想家として比較的正しき人には相違ないが、講和會議に於て自己の提案たる國際聯盟案の通過を計らん爲に他國の不義に贊せし如き到底義人と稱し得ぬ明證である、かのクロムウェルならば如何に善き交換事件を以てするも到底斯る不義に同意しなかつたであらう、併し此偉大にして義烈なりしクロムウェルさへ自己の罪を認むること頗る痛切にして、臨終に際しては其一生を回顧して一時は失望に陥つた程である、あゝ凡ての人は罪人である、義人は一人もないのである。

此大斷定を敢てなせしパウロの大膽と深刻は云ふを待たない、さはれ彼の論議は凡て殺すためならで生かすた

めである、否人を救はんためには先づ其人に罪人たるを自覺せしめねばならぬ故、當然の順序として此萬人有罪の大斷定を敢て爲したのである、そして然る後救ひの道を開示せんとするのである、聴者の罪を責めずして只管其歡心を買ふの言説に終始するは救ひの道を知らざる淺き教師の事である、救はんとする者は、そして救の道を知れるものは先づ萬人の有罪を高く叫ぶのである。

次ぎには「悟れる者なし神を求むる者なし」の語がある、「悟れる者」は原語 οὐρανιον (ホ スニオン)であつて此場合單に悟れる者の意ではなく神を知れる者と云ふ意である、次ぎの「神を求むる者」と相對して前者は悟性に於て神を知る者を意味し、後者は意志に於て神を慕ひ求むる者を意味するのである。

右はゴオデーの解釋を採つたものであるが他の學者の見方も略ぼ同様である、例へばマイヤーは「悟れる者」を敬虔なる者、「神を求むる者」を思想や努力が神の方に向ひたる者と解してゐる、又或る辭典には「悟れる者」を宗教的に明智なる者と解してゐる、孰れも大同小異と云ふべきである。

悟れる者なく神を求むる者なしとのパウロの此斷定は果して事實に適つたものであらうか、古今東西を尋ぬるに少數なりとも聖者賢哲なる者が在る、支那にも印度にもあつた、彼等は慥に明達之士であり又神を求むる者であつた、道と義とに對しての彼等の熱愛は其一生を通じて若やかであつた、そして其奉ずる所の者に對しての獻身と犠牲とは嚴かにして強くあつた、ファラーの名著たる『神を求めし人々』(Seekers after God) は、エビクテス、セネカ、マールクス・オウレリウス三聖の評傳であるが、孰れも貴き境地を踏める聖者である中にも、エビクテスの如きは眞に至聖と云ふべき値ありと思はるゝ程である、かく考へ來るも我等は尚ほパウロに同意して「悟

れる者なし神を求むる者なし」と云はねばならぬのであらうか——世に數多からぬ聖人、賢者に對する我等の尊敬を傷けてまでも。

併し乍ら問題は彼等が眞に悟れる者なるか、眞に神を求めし人なるか如何に存する、熱誠の熾烈なりしと獻身の強固なりしとは我等慥かに之を認める、さはれ彼等の「悟り」は果たして全くあつたであらうか、即ち彼等は文字通り悟れる者——眞に神を知れる者——であつたであらうか、我等は彼等に何かしら或物の缺けたるを感じざるを得ない、口には言ひ表はし得ぬ或る「物足らなさ」を感じざるを得ない、彼等は神を知らぬではないが其知り方は充分ではない、彼等は眞の神を知つた人ではなかつた、即ち神を眞に知つた人ではなかつた、これ彼等を貶して云ふのではない、彼等の眞相を語らんとするのである、勿論彼等が貴き人であつたとは云ふ迄もない、又彼等に對して我等が敬意を表することも事實である、併し聖書の意味に於ては彼等も又罪人であつたこと、そして此一點に於ては彼等は其同族たる他の人間と全く同一であつた事を我等は認める、そして注意すべきは彼等が人類中の極少數者であつた一事である、而してパウロが聖書の言を借りて此斷定を敢て下したる時に於て、彼は勿論此極少數者を眼の前に置いたのではなくて人類全體を眼の前に置いたのである、それだけパウロの此斷定の力と合適とを我等は認めざるを得ないのである。

次ぎは十二節である、「皆曲りて誰も彼も邪よこしまとなれり、善を行ふ者あるなし一人だにあるなし」と云ふ、「曲りて」は脱線だつせんしての意、「邪よこしまとなれり」は益えきなき者となれりの意である、人は皆誰も彼も正しき道より脱線して益なき者となつて居ると云ふのである、これ果して事實であらうか、其次の「善を行ふ者あるなし一人だにあるなし」

と共に承認し難き斷定であると見られ易いのである、之に對しては前節の疑義に對すると同様の答辨を我等は與へ度いのである、即ち眞に善を求むる者世にあるか、又眞の善を求むるもの世にあるかとの問を發し度いのである、其動機の中に一毫の私心をも混へずして眞に——完全なる純潔を以て——何等の計量なくして、心よりの自然に而して至純に善を求める者が世に存するか、又眞の善、唯一眞正の善 (the good) を求める者があるか、神が人に求むる善、神の獨子キリストに現はれたるが如き善、かゝる最上善を求める者が世にあるか、かく問はるゝ時は、ナザレのイエスを除いては古も今も善を行ふ人一人もなしとの斷案を下すの已むなきに至るのである。

大哲カントは云ふた、「最も善きものは善き意志である、故に此善き意志より出でしものが眞の善である」と、此意味に於ける善即ち眞醇なる善を行ふ人が世に果して在るであらうか、其動機に一厘たりとも不純を混へない所の——純粹に善き意志のみより發する所の善を行ふ人が果して世に在るであらうか、他人^{ひと}から見れば善人と見ゆる者も、其人の心の中に分け入て見る時は其處に善以外のものが潜むに相違ない、故に善人を以て我も人も容^{ゆる}せし如き人にして、後キリストの教に入りて銳利なる解剖を自己の上に加ふるに至るや、自己の罪と不善との姿が頗る鮮かに自己の心に感得せらるゝのである。

然^{うまれながら}り性來の人には洵に善は行へない、性來の人の中に善人はない、人は性來にして怒の子、肉の慾に循ひて日を送る者、愆^{とが}と罪を行ひて日を送る者である (エペソ書二章)、比較的の惡人と相對して比較的の善人はある、比較的の惡に對して比較的の善はある、勿論後者は前者より貴い、併し性來の人に醇眞の善の行へぬ事には變りはない、さりながら或時人は醇眞の善を行ふことがある、それはキリストの靈來つて其人を充分に占領した時であ

る、この時は人は我にもあらで眞の善を行ひ得るのである、中世紀における獨逸の名高き説教者タウレルは、有力なる傳道者として幾年かを經過せし後も尚眞の善の行ひ得ぬを感じて悶々の情に堪へず、或時ストラスブルグ市の郊外をライン河に沿ふて漫步しつゝあつた、時に一人の老人の歩み來るに會し、

私にとつては凡ての日が善き日である、

惡しき日は一日とてもない。

との老翁の歡喜の語を聞きて不思議に思ひ、「もし神汝を地獄に落し入なば如何」との問を發した、老翁は其時快活に答へた。

地獄とは何であるか私は知らない、

併し私は主が私を離れ給はぬ事を知つてゐる。

一の腕なる謙遜は彼の人間性を抱き

他の腕なる愛が彼の神性を握む。

それ故私の往く處は何處へでも彼が往く。

彼なくして黄金の天國にあるよりも

彼と共に火の地獄に居る方が優つてゐる。

老翁の此語を聞いてタウレルの眼より涙は迸はなつた、彼は此單純なる信賴に住む老翁より「煩瑣な神學者たちの決して知らざる智慧」を教へられたのである（詩人ホイットチャ作『タウレル』より）、地獄に落つるもキリストを

離れじとの信頼は、至純なる信頼である、天國に入るためにキリストを信じ善を爲すと云ふ心には兎角不純が混じり易い、結果の善きにも惡しきにも係らずして神を信じ善を選ぶと云ふは醇乎として醇なるものである、混りなき寶玉の如き美はしさが其處に在る、此老翁の如きは此域に達して居たのである、キリストの靈、我等を潔むる時われらも亦此種の善に到達し得るのである、併し乍ら勿論これは人類中の或特別の變化を受けた人のみに係る、性來の人には到底眞の意味の善は行はれない、「善を行ふ者あるなし一人だにあるなし」である。

次にパウロは尚ほ聖句を引用して言ふた「其喉は開けし墓なり、其舌は詭詐を語り、其唇の下には蝮の毒あり、其口は詛と苦とにて滿つ」と、是れ口舌を以てする罪惡である、即ち言語を以て人を欺き、苦め、罵り、譏る所の罪である、その罪が如何に人間に普通なるか、如何に地上のあらゆる人種に行きわたれるかは人の皆知る所である、極めて普通なる、そして小なる如く見えて實は大なる罪である。

次には「其足は血を流さんとして疾し、殘害と災難とは其道に遺れり、彼等は平和の道を知らざるなり」とある、こは行爲に現はるゝ罪——生活の状態としての罪——を述べた語である、「其足は血を流さんとして疾し」とは其生活が他を苦めて己を益さんために營まれつゝあるを示す、「殘害と災難とは其道に遺れり」は人を殘害しつつ歩みし跡に慘憺たる狀の遺れるを意味する、「彼等は平和の道を知らざるなり」とは平和が彼等の本性に非ず又彼等は平和の何たる乎を知らざる事を云ふのである。

以上、口舌と行爲との罪及び其狀態は世に常なる事である、何時の代にも何の國にも之は常にある事である、實にこれ人類の罪の姿そのまゝの描寫である、殊に其激しきは戦争の前及び戦争の最中である、戦將に開かれん

として、其風聲^{うはさ}全地に鳴りひびく時、及び戦いよいよ開かれて惨たる流血が全土に漲る時、その時こそ實に此處にある文字通りが事實である時である、如何に民と民とが毒舌を以て相對することよ、如何に惡魔のそののかす詛^{のの}の叫が世に充つることよ、如何に憎惡そのものゝ如き言葉が瀧の如く流ることよ、極度の詛と憎しみが言葉となりて外に表はるゝ有様は實に人が化して惡魔となつたのではないかと思はるゝ程である、而かも戦争終結するや、此詛と苦とにて其唇を充たせし熱狂者等は忽ち化して平和の使徒となり、以て人類平和促進の運動にたづさはる如きは却て其罪惡と昏迷の深きを思はしむる事である、

此度の歐洲戰亂に於て聯合國が敵國を呼ぶ惡魔を以てし、一人たりとも多く敵を殺すを以て正義人道に奉仕する所以なりとし、其宗教家等が神とキリストの名を以て此事を高調し宣傳せし有様を思へ、如何にパウロの語そのまゝなるよ、そして獨塊と雖も此點に於て勿論其敵國に劣らなかつたのである、殊に獨逸に於てはカイザルに事ふるを以て神に事ふると同一なりと見、自國の戦争を以てキリストのためにする神聖戦争と見做し、從つて敵國を以て神の業を妨ぐる惡魔と做す如き思想の根深かりしを思へ、あゝ共に正義人道の名に據り、共に神とキリストとのために謂ゆる惡魔に對して戦をなしたのである！「其舌は詭辯^{いつぱん}を語り、其唇の下には蝮の毒あり……其足は血を流さんとして疾し、殘害と災難とは其道に遺れり」とは寔に彼等に於て文字通り眞であつたのである。

然らば人類は戰に際してのみ斯く毒舌と惡行に充つるか、否然らず平[○]時[○]に[○]於[○]て[○]も[○]亦[○]然[○]り[○]、たゞ戰に際しては一入著しく現はるゝのみである、今日北米合衆國其他が日本民族に對して極度の惡口を弄し、其云ふ所多くは虚構^{いつげん}の誣言なる如きは其一例である、其他民と民の間に、人と人の間に常に恐るべき惡言非行の交換されつつある

は人皆自ら能く知る所である、あゝパウロの言をして偽りならしめよ、然らば人類と其社會とは如何に幸福なることよ、されどもパウロの言が事實其儘の記述なるを如何、あゝ人類の罪と迷は實に深きかな——古に於て又今に於て、然り古に於て又今に於て。

十八節は「神を畏るゝの懼れ其の目の前にあるなし」と云ふ、これ前回に述べし如く全體を總括する語である、「神を畏るゝの懼れ」とは神に對する敬虔を指す、神と其聖旨みことば、その審判を心に感ずることを意味するのである、「其目の前になし」とは勿論心の狀態を形に託して述べた語であつて、心に留めずと云ふ程の意である、彼等は神に対する敬虔を心に留めないのである、これ彼等の深罪の總括であり又原因である。

以上パウロは舊約聖書の語句を巧みに排列して「人類悉く罪あり」との自己の主張の裏書となした、彼は先づ異邦人の悉く罪ある事を述べ、次ぎにユダヤ人も亦悉く罪ある事を述べ、然る後三章九節に於て「然らば如何にぞや、我等勝れるか、決してなし、そは我等既にユダヤ人もギリシア人も皆罪の下に在ることを證せり」と斷定して「人皆すでに罪を犯した」ることを明白に主張したる後此聖句引用となつたのである、故に茲に我等は當然自己一人について考へざるを得ざるに至つたのである、何となれば、人類全体と云へば、其中には云ふまでもなく自己もふくまれて居るからである、其時我等は羅馬書一、二、三章に於て描かれし如き罪を犯さずと辯ずるも何等の辯解とならぬのである、何となれば聖書に謂ゆる罪は人の外に表はれし行爲よりも寧ろ其衷に潜む心の姿に係はるものであるからである、心に於て不義を行ひし者は不義者である、心に於て不善を行ひし者は不善者である、心に於て凶殺をなせし者は凶殺者である、心に於て姦淫を犯せし者は姦淫者である、其他パウロの列擧せ

し凡ての罪は我等がよし、行ひに表はさずとも心に於て行ひ又は行はんとする處の罪である、然り我は明に罪人である、神は明に此事を示した、聖書は明に此事を教へた、神を知らずば宜かりしものを！ 聖書を學ばずば宜かりしものを！ 併し今や既に如何とも爲すことは出来ない、我罪の醜き姿は我眼の前に今は些の曇りなく明かである、われ願ふ所の善は之を行はず却て願はざる所の惡は之を行ふ、善なるものは我に即ち我肉に居らざるを知る、我を擲とする罪の法は慥かに我に在る、そして我が心の法を抑へてゐる、「あゝ我れ惱める人なるかな」、然りあゝ我れ惱める人なるかな。

併しながら「此死の體より我を救はん者は誰ぞや」との叫び一度起る時は、即ち自ら己を救はんとせずして他の我を救ふ者を見出さんとするに至る時は、おそ晩かれ早かれ「これ我等の主イエスキリストなるが故に神に感謝す」との歡聲を擧ぐるに至るのである、そして自己の罪惡深重なるすら尚ほ罪を赦されて救に浴するを知りて、感謝の無限なると共に亦誰人も救に入り得るものなる事を悟りて強き傳道心は自おのづからにして生起するのである、然らば凡ての良き事の根柢に自己の罪の認識が存する、之なくしては一も良き事は生れない、歡びの花は黒き土より生ひ出づる外はない、人類凡ての罪人なること、そして自己の罪人なること、此事は先づ明かに認められねばならぬ——己れの爲にも又人の爲にも、故にパウロは救の奧義を説示せんとして先づ此事に其銳利なるペンを揮つたのである。

三章九節から二十節までが、全人類を罪人として断定している箇所であることはすでに述べた通りである。そして全人類というならば、当然その中に自分が含まれていることを認めざるを得ない。では、自分が罪人と断定されたことは、嫌がるべき事柄であろうか。いや、そうではなく、これこそむしろ祝すべき事柄なのである。罪がないところに救いはない。そして、罪の感覚が浅いところには救いの喜びも浅く、罪の感覚が深いところには救いの喜びも深くなる。深く恵みの豊かな泉に汲もうと志す者は、まず鋭い解剖力をもって自分の心を切り開かねばならない。それゆえ、罪の認知は信仰の礎石として極めて重要なものである。私たちは、再び十節から十八節(すなわち旧約聖書からの引用句が重ねられている箇所)に注意を払わなければならない。

「義人はいない。一人もない」という最初の言葉は、まず力強く私たちの胸に迫ってくる。これは果たして人類の実際の姿であろうか。私たちは「然り」という断定をあえて下すものである。これを現代において見てみると、例えばアメリカのウッドロー・ウィルソン前大統領のような人物は、今の世に珍しい理想家として、比較的に正しい人には違いない。しかし、講和会議において、自身の提案である国際連盟案の通過を図るために、他国の不義に賛成したことなどは、とうてい義人と称し得ない明白な証拠である。かのオリバー・クロムウェルであれば、いかに良い交換条件であっても、とうていこのような不義に同意しなかったであろう。しかし、この偉大で義に厚かったクロムウェルさえ、自身の罪を認めることが非常に痛切で、臨終に際してはその一生を振り返

り、一時は失望に陥ったほどである。ああ、すべての人は罪人なのであり、義人は一人もいないのである。

この大断定をあえて行つたパウロの大胆さと深遠さは言うまでもない。とはいえ、彼の議論はすべて殺すためではなく、生かすためである。いや、人を救うためには、まずその人に罪人であることを自覚させなければならないので、当然の順序として、この万人有罪の大断定をあえて行つたのである。そしてその後、救いの道を開示しようとするのである。聴衆の罪を責めずに、ひたすらその歓心を買うような言動に終始するのは、救いの道を知らない浅薄な教師のやることである。人を救おうとする者、そして救いの道を知っている者は、まず万人有罪であることを大声で叫ぶのである。

次に、「悟る者はいない。神を求める者はいない。」という言葉がある。「悟る者」は原語の *hosunio*（ホスニオン）であり、この場合、単に悟つた者という意味ではなく、神を知っている者という意味である。次の「神を求める者」と対比して、前者は知性において神を知る者を意味し、後者は意志において神を慕い求める者を意味するのである。

右はゴッダーの解釈を採用したものであるが、他の学者たちの見方もほぼ同様である。たとえばマイヤーは「悟る者」を敬虔な者、「神を求める者」を思想や努力が神の方向に向かっている者と解釈している。またある辞書では「悟る者」を宗教的に明智な者と解釈している。いずれも大同小異と言うべきである。

悟りのある人はなく、神を求める人はいないというパウロのこの断定は、果たして事実に適っているであろうか。古今東西を尋ねてみると、少数ではあるが聖者や賢者がいる。中国にもインドにもいた。彼らは確かに聡明な人

物であり、また神を求める者であった。道と義に対する彼らの熱愛は、その一生を通じて鮮やかであり、そして彼らが仕えた者に対する献身と犠牲は厳かで強かった。ファラーの有名な著作である『神を求めし人々』(Seekers after God) は、エピクテトス、セネカ、マルクス・アウレリウスの三聖者の伝記であるが、いずれも尊い境地を踏んだ聖者である中でも、エピクテトスに至っては真に至聖と呼ぶべき価値があると思われるほどである。このように考えてきても、私たちはなおパウロに同意して「悟る人はいない。神を求める人はいない」と言わなければならぬのであろうか。――世に多くはない聖人、賢者に対する私たちの尊敬を傷つけてまで。

しかしながら、問題は彼らが真に悟りのある者であるのか、真に神を求めた人であるのか、という点にある。熱誠が燃えるようであったこと、そして献身が強固であったことは、私たちは確かにそれを認める。だが、彼らの「悟り」は果たして完全であったであろうか。すなわち、彼らは文字通りの意味で悟りのある者、真に神を知っていた者であったであろうか。私たちは彼らに何かしらあるものが欠けていると感じざるを得ない。口には言い表せないある「物足りなさ」を感じざるを得ない。彼らは神を知らないわけではないが、その知り方が十分ではない。彼らは真の神を知った人ではなかった、すなわち、神を真に知った人ではなかったのである。これは彼らを貶して言うのではない、彼らの真実の姿を語ろうとするのである。もちろん、彼らが貴い人であったことは言うまでもない。また、私たちが彼らに対して敬意を表することも事実である。しかし、聖書的な意味においては、彼らもまた罪人であったこと、そしてこの一点においては、彼らはその同族である他の人間と全く同一であったことを、私たちは認める。そして注意すべきは、彼らが人類の中の極めて少数者であったという事実である。

そしてパウロが聖書の言葉を借りてこの断定をあえて下したとき、彼はもちろんこの極少数者を念頭に置いたのではなく、人類全体を念頭に置いたのである。それだけにパウロのこの断定の力と適切さを、私たちは認めざるを得ないのである。

次は十二節である。「すべての者が離れて行き、だれもかれも無用の者となった。善を行う者はいない。だれ一人いない」と言う。「離れて行き」は脱線して、という意味で、「無用の者となった」は益なき者となっている、という意味である。人は皆誰も彼も、正しい道から脱線して役に立たない者となっている、というのである。これは果たして事実であろうか。その次の「善を行う者はいない。だれ一人いない」という言葉と共に、承認し難い断定であると見なされやすいのである。これに対しては、前節の疑問に対するのと同じ答えを、私たちは与えたいのである。すなわち、真に善を求める者が世にいるか、また真の善を求めるものが世にあるか、との問いを発したのである。その動機の中に一毫の私心をも混ぜることなく、真に――完全な純潔をもって――何の計算もなく、心からの自然さと、至純な心で善を求める者が世に存在するであろうか。また、真の善、唯一真の善(the good)を求める者がいるであろうか。神が人に求める善、神のひとり子キリストに現れたような善、このような最上の善を求める者が世にいるであろうか。このように問われるとき、ナザレのイエスを除いては、古も今も善を行う人は一人もいないという断定を下すことを余儀なくされるのである。

大哲学者カントは言った。「最も善いものは善い意志である。ゆえに、この善い意志から出たものが真の善である。」と。この意味における善、すなわち真に純粋な善を行う人が世に果たしているであろうか。その動機にわず

かでも不純を混ぜない、純粹に善い意志のみから発する善を行う人が、果たして世に在るであろうか。他人から見れば善人と見なされる者も、その人の心の中に入り込んでみると、そこに善以外のものが潜んでいるに違いない。それゆえ、善人として、自分も人も許容していたような人が、後にキリストの救いに入り、鋭い解剖を自分自身に加えるようになるや、自分の罪と不善の姿が、非常に鮮やかに自分の心に感じられるのである。

然り、生まれながらの人には本当に善は行えない。生まれながらの人の中に善人はいない。人は生まれながらにして、怒りの子、肉の欲望に従って日々を過ごす者、とがと罪を行って日々を過ごす者である（エペソ人への手紙二章）。比較的な悪人に対して比較的な善人はいる。比較的な悪に対して比較的な善はある。もちろん、後者は前者よりも尊い。しかし、生まれながらの人に純粹な善が行えないという点に変わりはない。そうではあるが、ある時、人は純粹な善を行うことがある。それはキリストの御霊が来て、その人を十分に占領した時である。この時、人は自分でもなく、真の善を行い得るのである。中世におけるドイツの有名な説教者タウラーは、有力な伝道者として幾年かを過ごした後も、なお真の善が行えないのを感じて、悶々とした気持ちに耐えきれず、ある時、ストラスブール市の郊外をライン川に沿って散歩していた。その時、一人の老人が歩いてくるのに出会い、私にとつては、すべての日が善い日である、

そして悪い日は一日としてない。

との老翁の喜びの言葉を聞いて不思議に思い、「もし神があなたを地獄に落とすならばどうなるのか」との問いを發した。老翁はその時、快活に答えた。

地獄とは何か、私は知らない。

ただ私は、主が私からお離れにならないことを知っている。

一方の腕である謙遜は、主の人間性を抱き、

もう一方の腕である愛は、主の神性を掴む。

それゆえ、私の行くところはどこへでも、主も行かれる。

主なくして黄金の天国にいるよりも、

主と共に火の地獄にいるほうが勝っている。

老翁のこの言葉を聞いて、タウラーの目からは涙がほとばしった。彼は、この単純な信頼に生きる老翁から、「煩瑣な神学者たちが決して知らなかった智慧」を教えられたのである（詩人ホイットィアー作『タウラー』より）。地獄に落ちてもキリストを離れまいという信頼は、至純な信頼である。天国に入るためにキリストを信じ、善を行うという心には、とかく不純が混じりやすい。結果が良いか悪いかに関わらず、神を信じ、善を選ぶというのは、まことに純粋なものである。混じりけのない宝玉のような美しさがそこにある。この老翁のような人は、この境地に達していたのである。キリストの御霊が私たちを清めるとき、私たちもまたこの種の善に到達し得るのである。しかしながら、もちろんこれは人類の中のある特別な変化を受けた人にも関わる。生まれながらの人には、とうてい真の意味の善は行えない。「善を行う者はいない。だれ一人いない」のである。

次にパウロは、さらに聖句を引用して言った。「彼らの喉は開いた墓。彼らはその舌で欺く。彼らの唇の下には

まむしの毒がある。彼らの口は、呪いと苦みに満ちている」。これは口と舌による罪悪である。すなわち、言葉をもって人を欺き、苦しめ、罵り、そしてそのような罪である。その罪がどれほど人間に普通であり、どれほど地上のあらゆる人種に行き渡っているかは、誰もが知るところである。極めて普通である、そして小さいように見えて、実は大きな罪なのである。

次には「彼らの足は血を流すのに速く、彼らの道には破壊と悲慘がある。彼らは平和の道を知らない」とある。これは行為に現れる罪——生活の状態としての罪——を述べた言葉である。「彼らの足は、血を流すのに速く」とは、彼らの生活が他者を苦しめて自分自身を利するために営まれていることを示す。「彼らの道には、破壊と悲慘がある」は、人を破壊しながら歩んだ跡に、悲慘な様子が残ることを意味する。「彼らは平和の道を知らない」とは、平和が彼らの本性ではなく、また彼らが平和の何たるかを知らないことを言うのである。

以上、口と舌と行為による罪、およびその状態は世に常なる事柄である。いつの時代にも、どの国にも、これは常にあることである。実に、これは人類の罪の姿そのままの描写である。特にその激しさは、戦争の前、および戦争の最中である。戦いが開かれようとして、その噂が全地に鳴り響くとき、および戦いがついに開かれて、悲慘な流血が国土全体に満ち溢れるとき、その時こそ実に、ここに記されている文字通りのことが事実である時である。いかに民と民とが毒舌をもって対し合うことよ。いかに悪魔がそのかす呪いの叫びが世に満ちることよ。いかに憎悪そのもののような言葉が滝のように流れることよ。極度の呪いと憎しみが言葉となって外に現れる様は、実に人が化して悪魔となったのではないかと思えるほどである。しかも戦争が終わるや、この呪いと苦

さでその唇を満たしていた熱狂者たちは、たちまち化して平和の使徒となり、もって人類平和促進の運動に携わるようなことは、かえってその罪惡と愚かさの深さを思わせる事柄である。今度のヨーロッパの戦乱において、連合国が敵國を惡魔と呼び、一人でも多く敵を殺すことをもって正義人道に奉仕する方法であるとし、その宗教家たちが神とキリストの名をもつてこのことを高調し宣伝した様子を思いなさい。いかにパウロの言葉そのままであることよ。そしてドイツとオーストリア・ハンガリーも、この点においてはもちろんその敵國に劣らなかつたのである。特にドイツにおいては、皇帝に仕えることを神に仕えることと同一と見なし、自國の戦争をキリストのための神聖戦争と見なし、したがって敵國を神の業を妨げる惡魔と見なすような思想が根深かつたことを思いなさい。ああ、共に正義人道の名に拠り、共に神とキリストとのために、いわゆる惡魔に対して戦いをなしたのである！「彼らはその舌で欺く。彼らの唇の下にはまむしの毒がある……彼らの足は血を流すのに速く、彼らの道には破壊と悲慘がある」とは、まことに彼らにとつて文字通り眞実であつたのである。

では、人類は戦争に際してのみ、このように毒舌と惡行に満ちるのだろうか。いや、そうではない。平時においてもまた然りである。ただ戦争に際しては、ひととき著しく現れるにすぎないのである。今日、北米合衆國その他が日本民族に対して極度の惡口を弄し、その言うことの多くは虚構の偽りであるようなことは、その一例である。その他、民と民の間に、人と人の間に、常に恐るべき惡言非行が交換されつつあることは、誰もが自らよく知るところである。ああ、パウロの言葉が偽りであつてくれれば、人類とその社会はどれほど幸福であらうか。しかし、パウロの言葉が事實そのまゝの記述であるとは、どういふことだろうか。ああ、人類の罪と迷いは、実

に深いものだ。――古においても、また今においても。然り、古においても、また今においても。

十八節は、「彼らの目の前には、神に対する恐れがない」と言う。これは前回に述べたように、全体を総括する言葉である。「神を恐れること」とは、神に対する敬虔を指す。神とその聖旨、その審判を心に感じ取ることを意味するのである。「彼らの目には……ない」とは、もちろん心持ちの状態を形に託して述べた言葉であって、心に留めない、というほどの意味である。彼らは神に対する敬虔を心に留めないのである。これが彼らの深い罪の総括であり、また原因である。

以上、パウロは旧約聖書の語句を巧みに配列して、「人類すべて罪あり」との自身の主張の裏付けとした。彼はまず異邦人のすべてが罪あることを述べ、次にユダヤ人もまたすべて罪あることを述べた。そうした後、三章九節において「では、どうなのでしょう。私たちにすぐれているところはあるのでしょうか。全くありません。私たちがすでに指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も、すべての人が罪の下にあるからです」と断定して「人皆すでに罪を犯した」ることを明白に主張した後、この聖句引用となったのである。したがって、ここで私たちは当然、自分一人について考えざるを得なくなつたのである。なぜなら、人類全体というならば、その中には言うまでもなく自分も含まれているからである。その時、私たちはロマ書一、二、三章において描かれているような罪を犯していないと弁明しても、何の弁解にもならないのである。なぜなら、聖書に言われている罪は、人の外に現れた行為よりも、むしろその胸の内に潜む心の姿に関わるものであるからである。心において不義を行った者は不義者である。心において不善を行った者は不善者である。心において殺人をなした者は人殺しである。

心において姦淫を犯した者は姦淫者である。その他、パウロが列挙したすべての罪は、私たちがたとえ行為に表さなくても、心において行い、または行おうとするところの罪である。然り、私は明らかに罪人である。神は明らかにこのことを示された。聖書は明らかにこのことを教えた。神を知らなければよかったものを！聖書を学ばなければよかったものを！しかし今や、もはやどうすることもできない。私の罪の醜い姿は、私の目の前に今は少しの曇りもなく明らかである。私は願うところの善は行わず、かえって願わないところの悪を行ってしまう。善なるものは、私に、すなわち私の肉には宿っていないことを知っている。私を捕虜にする罪の法則は、確かに私にあり、そして私の心の法則を抑えつけている。「ああ、私はみじめな人間です。」然り、ああ、私はみじめな人間である。

しかしながら、「だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか」との叫びが一度起こるとき、すなわち、自ら自分を救おうとせずに、他に自分を救う者を見出そうとするところに至るとき、遅かれ早かれ「私たちの主イエス・キリストを通して、神に感謝します。」との歓声を上げるに至るのである。そして、自分の罪が悪くて重いにもかかわらず、罪を赦されて救いにあずかることを知り、感謝が無限であると同時に、誰でも救いに入り得るものであることを悟って、強い伝道心が自然に生起するのである。そうだとすれば、すべての良いことの根底に、自分の罪の認識が存在している。これがなくては、一つも良いことは生まれない。喜びの花は、黒い土から生え出るしかない。人類すべての罪人であること、そして自分自身が罪人であること、このことはまず明らかに認められねばならない——自分のためにも、また人のためにも。ゆえに、パウロは救いの奥義を説き明

かそうとして、まずこのことにその鋭利なペンを振るったのである。